

This is London

Queen Mary University of London
Centre for Trauma Sciences

大森 一彦

(順天堂大学医学部附属静岡病院救急診療科)

2021年7月末に日本を発ち、私は現在、ロンドンのQueen Mary University of LondonのCentre for Trauma Sciencesで外傷の臨床研究を行っています。Centre for Trauma Sciencesでは、通常の外傷診療のほか、病院前診療、リハビリ、虐待など外傷に関わる研究を幅広く行っています。現在、私は世界中から集まった13人のフェローと共に、外傷性凝固障害や大量輸血、病院前輸血などの研究に取り組んでおります。

このフェローたちの中には、イタリアやフランス、ニュージーランド、カナダ、サウジアラビアなど様々な国から来た人々がおり、彼らのバックグラウンドも医師や看護師、パラメディック、臨床工学技士と多岐にわたります。彼らとの交流を通じて、異なる国の医療システムや文化について学ぶことができ、本当に貴重な経験をしています。さらに、驚くことに皆、日本のことが大好きで、一緒にラーメンやうどんを食べに行ったりもしています。日本にいたら、このような経験やネットワークを拓けることは難しかったでしょう。

ロンドンには多国籍の人々が集まる多様性に満ちた都市であり、異なる文化、異なる宗教を持つ人々が同じコミュニティの中で生活しています。私の職場や自宅周辺には日本人がほとんどおらず、自分がマイノリティの世界を経験し、日々多くの刺激を受けています。慣れ親しんだ日本を離れたことで、人間としての柔軟性や適応能力が身についていると感じます。

さらに、ロンドンでは詐欺に遭ったり、電気が使えなかったり、水が出なかったり、必要なものがすぐに手に入らなかったりと、日本にいたら考えられないような問題が次々と舞い込んできます。しかし、こちらの人々は「This is London」と言って普通に生活しており、私も何が正しいのか分からなくなることがあります。それでも、出来る限りこれらの経験をポジティブに捉えるようにし、これらの困難を乗り越えることで、より一層人間として成長していると実感しています。

この留学中に学んだこととしては、やりたいことは次から次へと出てきますが、留学期間という限られた時間の中で自分が達成すべき目標を定め、後悔のないよう行動していくことの大切さと、言いたいことが言えなかったり、言われたことが聞き取れなかったりと言語の壁で落ち込んでも、トライし続けなければ前に進まない重要性を学んでいます。

留學生活は孤独、挑戦、苦勞、失敗などの連続で辛いことも多いですが、日本では決して味わえない経験ができていることに感謝し、前を向いて楽しみながら過ごしています。留学

生活が「思い出」ではなく「財産」になるよう、日々努力し、学んだことを日本に還元していけたらと考えています。

帰国後は再び救急医として働くことが決まっています。この留学の経験を活かし、救急分野での研究の多様性を維持するために、日本でも研究ができる環境を興隆させ、次の世代に必ず継承していきたいと考えています。

最後に、このような貴重な経験をする機会をご支援いただいた上原記念生命科学財団の皆様に改めて心より感謝申し上げます。



病院から見たロンドン